

高校生に職業・労働を考える場を

—— 高校普通科の「現代社会と技術」の授業 ——

和光高校 森 下 一 期

はじめに

高校普通科の生徒に労働や職業に正面から向かい合ってほしいと考え、高校2年生の選択科目に「現代社会と技術」を設けて4年目となる。この科目を含む選択枠はA1と呼び、古典文学研究、基地と原発、生物研究、音楽研究など計12科目が設定されている。学年6クラスだから1科目平均20名くらいである。「現代社会と技術」は、この4年間30名、17名、21名、20名で平均的なところである。

高校普通科にこそ職業・労働を考える場をつくり出さねばならないと取り組んできたのだが、何しろ無から始めるのだから試行錯誤のくり返しである。A1という選択枠が「フィールドワーク」を含み、秋に3泊4日の研究旅行を行う、という条件を活用し、生徒を労働や職業の現実に触れさせることを軸に内容を考え続けている。つまり、学校の中だけでの取り組みでは、現代の高校生に切り込んでいくことはできないのではないか、自分の足を使い、現実と切り結んだときはじめて問題意識を喚起させることができるだろうと考えたわけである。

最初は、職業や労働の調査研究を中心に行ってみた。3年目の昨年度から「仕事の聞き書き」に取り組んでいる。以前から、調査研究においては書物で調べるだけでなく、直接仕事をしている現場を訪れ、話を聞いてくることを必須としてきた。その話が仕事の内容

だけでなく、働く人の気持ちまで表現されているとき、より深みのあるものとなり、取り組んだ生徒も「働くこと」へ接近しているようだったからである。

1. 「仕事の聞き書き」を通して

しかし、仕事の聞き書きをするといっても、インタビューはなかなか難しいものである。ともすると単純な問いと答えに終わってしまふ。イメージを持てるように、スタッズ・ターケルの『仕事』から「だれがピラミッドを建てたか」をコピーし配布した。その上で、これと、鎌田慧編の『日本人の仕事』の目次をコピーして渡し、希望する職業を個別にコピーしてあげた。さらに、全員の前で、アルバイトを経験した生徒に未経験の生徒がインタビューする練習をした。最初は、2、3の質問で立ち往生してしまうが、そのうちフローから質問が飛び交い盛り上がった。

このような準備の上で、最初は親にインタビューし、その上で、他の職業人にインタビューしたものを、それぞれB4の2枚にまとめさせた。提出されたものをすぐ印刷し、参考にできるようにした。

ある生徒はこの取り組みを次のように述べている。

「すごくやってよかったと思う。表面的なことだけでなく、その仕事のやってみてわかるような楽しさとか、魅力、大変なことと

かわかってすごく得した気になった。他の人のも読んでいろんな仕事を知ったし、なんか、それぞれの見方が変わった。

いろんな人の考えとか、何もしないでは絶対分らないようなことが分かってよかったと思う。こういうことを自分の将来に役立てられたらいいと思う。少し、利口になった気がしました。」

「自分にとってすごくプラスになったと思う。自分がこれから成人して社会人になり、生きていく上で職業というのはすごく重要だしさけて通れないのは当たり前だから今から考えておくというのはいいいことだと思う。それで用いられたインタビューという方法を通して、まず親の仕事とかをよく知ることができたし、その気持ちみたいのも知ることができた。ぼくにとってとても参考になりました。その他にも、外の世界の人たちにインタビューすることでもプラスになったと思います。どういう仕事があり、どういう人たちがいるかということはずごく好奇心をさそったが、その好奇心を満たすことができたと思う。他の人のインタビューを読むことにより、他の人がどう思いどうその仕事に打ち込んでいるかということがわかった。現代は情報化時代でいろんなことが入ってくるけれどそういうことに流されないで、今までの経験を生かして自分にあった仕事に就きたいと思いました。インタビューをしてよかったと思います。」

ある生徒は、「何か世界が広がったっていうか、色々な人の仕事を通じて、人の生き方について考えさせられた。」とも語っている。これまでの自分の世界になかったものを感じとることができたのであろう。

一方、インタビューという取り組み自体に意義を見いだした生徒もいる。

「二回目のテニスショップの店長さんのときは、インタビューがものすごい充実した時になった。僕はこの日のために友達のを研究して事前の準備をおこたらずにやって、前日に

アポをとるなどして完璧な程に事を進めていった。インタビューでもおじさんは、僕の気持ちに慮ってくれるかのように、素直に心を打ち明けてくれた。そして驚いた事に知っていたおじさん以外の、また一面や大人の社会など、普段耳にすることのないさまざまなことを聞かせてくれた。

僕は、このインタビューというものは、その人の人生観や思想などをわずかな時間で理解するための一つの方法だと思う。そのためには、おたがいの胸のうちを明かすための環境（事前にTelをしたり）というのも大切なことだと思う。これからの社会で、このインタビューという方法は、大変重要視されていくと思う。その上でも、今回の勉強はとても満足し、実のあるものだったと思う。」

2. 「聞き書き 仕事」

S. K君のインタビューを全文紹介しよう。仕事は「電気屋さん」である。

「インタビューを誰にしようかなと考えたとき、あまり普通の人ではおもしろくないなと思い、母に相談してみたら、“いのさんがいいいんじゃない”と言ってくれた。言われたときにすぐ、そうしようと思った。“いのさん”とはよくうちに来る猪爪さんという電気屋さんで、僕がいのさんについて知ってることは、すごい陽気なおもしろい人でうちの親との付き合いは僕が生まれるもっと前からだということと、電気屋さんのくせに店舗をもっていない、ということぐらいだった。僕はこの店舗をもっていない、というところがおもしろいかなと思ってインタビューすることにした。

Q：何故電気屋さんになろうと思ったのですか？

A：電気系の専門学校に行っていた。当時はTVが白黒がほとんどで、TV屋さん（TVを修理する人のことらしい）になりたく

て、東芝系の会社のサービス（修理など）の仕事をしていた。

Q：何故その会社をやめたのですか？

A：独立したきっかけは、親にすすめられたから。いつも帰りがおそくて終電ばかりだったから。

最初はTVの修理だけだったのが、クーラーの修理とか、他の人がやりたがらないのをなおしたり、そういうのを会社にながらアルバイトみたいな感じでやっていた。お客さんに頼まれたらなんでもやるようにしていた。

その当時は、自分がなおせなかったら会社のハジ、先輩などに聞かないで自分の力でなおす、という意地があった。

（“いのさん”は思いついたことをすぐパツと口に出すので、こっちはあいつをいれるだけで、いろんな話が聞けるのでとてもありがたいのだが、まとめようと思うとかなり大変である。そしてお目当ての質問をしてみることにした。）

Q：何故、独立したときお店（店舗）を持とうと思わなかったのですか？

A：まず1つは、店頭品が嫌いだった。売らなかつたらまったく新品のまま売りたい。1度箱から出したものをまた箱にしまって、“ハイ新品です”というのが嫌だった。

（この時僕は、そんなどーでもいいことなのに、変な人だな、と思いながら聞いていた。はなしは続く）

会社につとめているときにわかったんだけど、お店から、出戻り品というのがあって、出戻り品というのは売れなかつたり、故障してたりして、1回お店に行ったんだけど会社の方にかえてくる品物で、そういう物をなおしたりして、他のお店へ新品として出したりして。そういうのも嫌だし、在庫の整理も大変だなと思った。だから物を売るのはカタログ販売という形で、客から注文を受けたものを、取りよせて、それを客に渡すというや

り方でやっている。それにお店を持つと修理の方があまりできなくなる。

（なんで、そこまで修理にこだわるのかなと思って、質問したと思う。）

時代の流れというか、お客さんのニーズとどうか。たとえば今なんか、仮にビデオがこわれたとすると、ふつうの電気屋さんなり、そのメーカーなりに持って行くでしょう。そこでなおせなかつたら、本部までもってかれて、さらにそこでこわれてる部分をまるごととっかえてしまうんです。それだったら時間もかかるし、お金もかかる。そういう物を私はなおせる自信がある。専門学校で見につけた基礎や今までの経験からくる応用力で。

（いろいろ話を聞いてると、本当にこの人は自分の実力に自信をもってるんだなと思う。）

おもしろい話で、TVがこわれたからメーカーの修理屋さんに来てもらってなおしてもらった。じゃあついでにクーラーの調子が悪いから見てもらおうと頼んでみるとできない。今のメーカーの人はTVの人はTVだけ、洗濯機の人は洗濯機だけ、クーラーの人はクーラーだけしかできない。変な話でしょう。私なんか何でもできる。電話だって大丈夫なんだから。

（ハハハ……といのさんは笑う。ふと思った、もうけはあるのか？）

たしかに、技術やさんだけじゃだめだから、カタログ販売として売っている。だけど、自分の利益のために無理に自分から売ろうとは思わない。自分は生活ができればよい。こないだもビデオをなおしてて、難しい故障で全然わからず、なおすのにたくさんの時間がかかってしまったけど、そのぶん高い金を取ろうとは思わない。

（本当に変な人だな。）

いろんな人のいろんな物を修理することによって、実力と信頼がつく。この信頼というのが大切で、彼に頼めば何でもできる、とい

う風にお客さんが思ってくれる。

はっきりいって殿様商売です。代理がきかないんですもん。わたしでなければならぬ。

(また大きな声で笑う。おもしろいんだ。)

この仕事をやっていて、何が大切かって、応用力が一番大切。それには長年の経験が必要。この前もなおして、ふと何年か前におぼえたことを使った。これは勉強でも人生でも一緒、いくらたくさんポケットをもっているてもそのポケットを開けられなくてはならない。どこのポケットに何をしまったかひらめかなければならぬ。

(お茶をのんだり、お菓子を食べながらいろんな話を笑いながら話している。)

私とお客さんは変な関係なんです。私は全然お客さんが神様だなんて思わない。客と自分は同格だと思ってる。むこうはむこうで、あいつにまかせりや大丈夫だと思ってる。だからお母さんなんてなんだって注文してきますよ、ねー。

(といって、うちの母を見て笑った。そして、夢について聞いてみた。)

昔からあまり考えなかった。これからどーなるとかは考えなかった。欲がないんだ。だから最近思うのは老後のこと。老後のことなんか何も考えなかったから、これからどーしよーかな。

(奥さんと顔をあわせて笑う。そしてまた続ける。)

誰もなおせないものをなおせたときの優越感がいいんだ。

(この独特の美意識がいのさんのすべてというか、いのさんを支えているんだな、と思いながら聞いていた。)

これからのことはわからない。お客さんのニーズにこたえていくから。だけど、一生電気屋。一生この形の修理屋さん。

(また大きな声で笑った。そしてまた、) 老後、どーしよーかなー。

――あとがき――

他にもたーくさん、話をしてくれたけど、専門的な言葉や、よくわからない話とか、おもしろい話とか、いっぱいだったけど、まとめるのが大変だから書けません。だけど、このインタビューをして思ったのは何度も文中に書いたけど、変な人だになって、その上すごい人だになって、思った。だけど、本当にこの人にインタビューしてよかったなって思った。」

次に、字数の関係で全文は紹介しきれないが、生徒は教師の意図をこえて現実の多様な問題にアタックしていく姿を見てみよう。

「浮浪者に聞く N. W

ぼくが何故彼ら(浮浪者)にインタビューしたかという、彼らに何かパワーを感じたからだ。山にこもって修業した人間が普通の人間が持っていないパワーを持っているように彼らも何かパワーを持っているように感じたから、ぼくは彼らにインタビューをした。Mさんの場合………(42歳、元営業マン)

夕方4時頃、ぼくの頭の中はどうしようかという思いでいっぱい。その時までぼくは4人の浮浪者にインタビューして全てことわられた。そして仕方なく家に帰ろうと考えていた。しかし、せっかく新宿まできたのだから、もう一人だけインタビューしていこうと思った。その一人というのが新宿のガードレールの下に寝ているMさんだった。ではさっそくインタビューに、いきたいと思う。

Q: あなたはどこに住んでいるのですか?

Mさん: 君が今すわっている(ぼくは今ガードレールにいる)所や、そこのコインロッカーなど、決まった所はないけど、とくに気に入っている場所は、そこの電話ボックスだね。

(………何と彼は電話ボックスに住んでいるようだった。確かに夜はあたたかいし、便利かもしれない。しかし、よく見

つけたものだ。)

Q：率直に聞きますが、何故このような人になってしまったのですか？

Mさん：ハハ、痛いところをついて来たね……（5分くらい考えている）。ついていなかったのかもしれない。ぼくが何故インタビューを快く引き受けたかという、この事を若い人に聞いてもらいたかったからかも知れない。ぼくは、会社のためにするだけの事をしてきたよ。でもね、1992年の初頭だったかな。突然、会社をやめてくれといわれた。いきなりだよ。（Mさんの目から涙が流れてきた）ここから先は話したくない。

（……………ぼくには何もする事はできないが、Mさんは日本の捨て石だったのだ。使えるときに使って、用がなくなったら捨てる。まるで第二次世界大戦時の沖縄だ。ひどすぎる。）

Q：普段は何をしてすごしているのですか？

Mさん：コインロッカーの下に落ちているお金をさがしたりしているよ。意外と落ちてるものだね、お金というものは。後は残飯をさがしているね。具体的に説明すると、マクドナルドのゴミ箱なんかはいっぱいゴミが落ちているね。まさにパラダイスだよ。

（……………彼の言うパラダイスという言葉の意味がぼくには理解できなかった。何故パラダイスなのか？住むところも決まっていなくて、何の幸せを感じるのだろうか？）

Q：見た所、あなたはまだ働き盛りに見えますが、どうして働きもせず浮浪者になったのですか？

Mさん：さあ、（笑）何でだろうねえ。これに関しては、2つの考えがあるね。一つはもう働き疲れてしまったからだね。……………（ここで彼はたばこをくわえ、火をつけた）ぼくは20年間ずっと働き続けた。運のいいことに嫁さんはいなかったしね。働

くのがいやになってしまったからぼくは何もかもを捨ててこの道を選んだ。もう一つは、何もかもを一からやり直したいからだよね。ぼくは浮浪者になって何もかも一からやり直したかったんだ。

（……………それから先は聞いていられなかった。見回りの人が来たからだった。何か中途半端な終わりだった。）

——中略——

……………以上でぼくのインタビューは終わりだ。彼らもいつものように自分の巣に帰り、食糧を見つけにゆくだろう。または人間に追い回され、にげまどう生活を送るだろう。ぼくら普通の人間はこのまま家に帰り、あたたかいご飯を食べて、テレビを見て疲れたら寝るだろう。（風呂もある）ぼくらは自由人の人達に何もすることはできなくても、自由人の事をもっと理解してあげることではできると思う。何故ちょっと汚ないからってあんなに迫害することは無いと思う。ぼくが質問して断わられた自由人の中の一人がこんなことを言っていた。“会社からゴマすってたくさん金もらってる浮浪者みたいなやつらに聞かれたって答える事はない。”たしかにその通りだと思う。ぼくはちゃんと自由人の事を考えてこれから生きたい。いろいろな事を思わせるインタビューだった。」

このインタビューに取り組むためにW君はこんな苦勞もしていた。

「僕がこのインタビューを書くのに一番大変だったのは、人探しです。ヒッピー（自由人のこと）にものをたずねるのは根気がいりました。もちろんむこうのヒッピーの人もただではこたえてくれませんのでワンカップでつりました。とっても大変で次の日は休日だったので、次の日は足が棒になっていて休みでよかったと思います。でもわざわざ聞きに行ったかいがありました。よかったです。つぎ、こういう機会がありましたらまた色々な人に聞きたいと思います。」

3. 研究旅行と仕事の聞き書き

研究旅行は「現代社会と技術」のハイライトである。トヨタ自動車などの現代工業生産と一時代前の製糸業、あるいは木工品生産を見学し対比しながら考える場としている。まだ、仕事の聞き書きを取り入れていなかった最初の研究旅行ではある生徒は次のようにまとめていた。

「<製糸工場> 僕は初めてまゆから糸を取るところを見た。これは本当にうれしかった。まゆからああゆう原理で糸を取ることを知れたのがよかった。

僕らが見学したところは、かいこからやっているところではなく糸を取れるだけだったが、随所に機能的に分かれているところがあった。最初なぜ手作業で取るのと、機械で取るのとで分けているのかと思ったが、出来上がった絹を持ってすぐに分かった。手作業で取った絹は機械でとった絹よりも数倍も軽かった。見た目はほとんど変わらないけれど、あの差は着たときに相当あると思った。やっぱり、どうせ絹のものを買うのなら手作業の方を選びたい。

けれどその手作業の工場で働いているのは、60を過ぎたおばあさんばかりで、若い人の姿などまったく見なかった。この後の日に東芝に行ったけれど、たしかにこんな単純な手作業よりも労働条件もいいし、普通に考えたら10人中10人が東芝に行きたがると思う。でもそこに手伝いに行くくらいの人がいたらいいのになと思った。だれが見たって機械の絹より人の手で作られた柔らかくて軽い絹の方がいいに決まっているのだから。

僕はあの経営しているおじさんにとっても魅力を感じた。僕が魅かれたのはあの言葉では言い表せない笑顔だった。東芝の説明してくれたおじさんの笑顔には、今どんどん進出している東芝のバックがあって誇り高げな感じだった。製糸工場のおじさんに会っていなければこんな印象は受けなかったと思う。製糸

業がどんどん低下していった中で、あせりも感じられなかったし、あきらめも感じられなかった。悲しみはあると思うけれどそれほど深くは感じられなかった。結局あの目は何だったんだろうと思った。なんて言ったらいいかわからないけれど、近代の工場では絶対に出会えないもので、昔ながらの製糸業、そしておばさんたちの雰囲気、仕事の雰囲気から生まれるのだなと思った。それとどうせ仕事をするなら、そんな雰囲気の中であんな目になれるようなところで働きたいと思った。

<全体の感想> この旅行で一番よかったと思えるところは、近代の工場と昔ながらの工場とを対比させて見れたところだと思う。トヨタ工場を見たときと製糸工場を見た後に見た東芝の工場とでは、見るときの意識がまるで違った。例えば製糸工場が東芝に勝てる場所はどこか。また、どちらで仕事をする方が（気分的に）楽でやりやすいのか。自分にはどっちの雰囲気の方が自分にあっているのかなど、トヨタを見たときは全然違っていた。何気なく行った旅行だったのに、得るものが多かった。」

現実を目の前にし、比較することによって、自分の思いを深めていく過程がよく表れている。だが、何かきれいすぎるものも感ずる。仕事、職業のもつドロドロしたものが感じられない。

一学期に仕事の聞き書きを取り入れて、研究旅行でもそれに挑戦できないかと考えた。生徒の「仕事の聞き書き」集を送付していたこともあり、研究旅行先でのインタビューを受け入れてもらえた。この年は、トヨタ自動車、オークビレッジ（高山：手作り家具等生産）、宮坂製糸（岡谷：座繰りと機械製糸）、岡谷プレジジョン（時計外装生産）を見学した。途中、豪雨の中、旧野麦街道を1.3キロ歩いて野麦峠を越えたりした。

S. W君は次のようにまとめている。
「研究旅行を終えて考えたこと

研究旅行でいろいろな働いている人を見た。いろいろな仕事をしている人の話を聞いた。そうしているうちに自分の中でちゃんと考えてみなくてはならないのでは、と思ったことがある。前々から漠然とは疑問に思ってたのだが、仕事——仕事とは何だろう、仕事をすることとはどういうことなのだろうか。

僕は今まで、この授業でいろいろな仕事について学び、働いている人にインタビューなどをしてきた。そして僕は、好きなことを仕事にしたい、と思っていた。いやいや仕事をして、それで給料をもらってもしょうがないのでは、と思っていた。しかし、仕事とは何のためにするのだろうか、仕事とは楽しいものなのだろうか。旅行中そういうことをいろいろ考えさせられた。

トヨタに行った時、園原さんという方にインタビューをした。その中で僕の気になったところをまとめると、“トヨタに入ったのは、大会社だから安定していて給料がいいから。給料がいいから30代で家が持てるし、いい車にも乗れる。……” お金のことばかり考えてる人だ、と思った。そして“仕事をして楽しいか”という質問には、“仕事と割り切っているから。遊んで金がもらえるわけじゃないし……。”と答えた。そして“他社のことは気にするか”という問には、“ある程度はするけど、僕らは生産だからそこまで口は出せない。”といった。僕は、この人は会社の歯車のひとつとなって、機械的に仕事をこなしてるつまらない人だと、失礼だがこのときはそう感じていた。

次の日のオークビレッジでインタビューした人は、こういう作業をするのが好きだから、といっていた。感じのいい人だなと思って聞いていた。そして昨日と同じ“仕事をして楽しいか。”という質問がでた。その人は“うーん、やっぱり仕事だからね……。”と渋って答えた。僕は少しショックをうけた。たぶん“楽しい”という答が返ってくるだろう

と思っていたので、意外な返答だった。

こちらへんから、いろいろ考えはじめていた。仕事なのだから、楽しくなくて当たり前なのか、なら何故つまらないことをやるのだろうか。そんなことを考えた。仕事をすればお金がはいる。お金がなければ生活ができない。だけど嫌なことをしても、お金というものを手にいれなければならないのか、何のために。自分のため？生活のため？そんなものどうにでもなるのではないのか。いや、まて、もし自分に家族がいたらどうだろう、妻がいて、子どもがいて、それらを養っていかなければならない……。そんなことをいろいろ考えた。しかし結論などでてこない。でてくるわけがない。

次の日の製糸工場で、おばあちゃんたちが“この仕事が大好き。やってて楽しい。ずっと続けていきたい。”そう言っているのを見て何かほっとした。だけど、おばあちゃんたちはこの製糸の仕事で生活をしょってるわけではない。だんなさんがいるのではないのか、そう思ってしまった。

家族を食わせていかなければならない、少しでもいい暮らしをしたい、家族にいい暮らしをさせたい、そう思えば、好きでないこと、楽しくないことをやっても当然なのではないか。別にお金のために働くのはむしろあたりまえのことなのではないか、そう思うようになった。

考えていくうちに、好きなことをやってる人はどんな人だろう、と思った。真っ先に頭にうかんだのは道場のプロの先輩だ。はっきりいってファイトマネーなんかたかがしれている。そのうえ試合などどんなにがんばって1年に5回もできない。とても生活などでできない。だからアルバイトをしながらやっている。バイトの合間に練習をして、練習の合間にバイトをして、それでもたいした暮らしなどできないと思う。扇風機すらないという。それでもあの人たちは何故続けてるのだろうか。

きっと好きだからだと思う。たとえどんな暮らしでも好きなことをやめたくないのだと思う。それもいい生き方だと思う。

仕事と割り切って好きでないことをやっていいお金をもらっても、たとえいい暮らしができずとも自分の好きなことをやるのも、楽しくない仕事でいいお金がもらえなくても、どれが正しい生き方で、どれが正しい仕事だとかは、わからないし、誰にも決めることができないし、人それぞれの考え方があるはずだと思う。ただ僕の考えは、“自分は何故、何のためにこういう仕事をしている”と自信をもってはっきり言える人がいい生き方をしている人で、いい仕事をしている人だと思う。

そして、僕はやっぱり自分の好きなことをやりたいと思った。だけど、もし自分に妻や子どもがいたとしたら、そっちを優先するのではないかと思う。

もう少しこのことについては、深く考えていこうと思うし、考えていかなければならないと思う。」

初年度のとらえ方とは違った視点がある。外から見ただけでなく、働いている人に面と向かい、語ることによって働き生活している“人”を感じたからではないだろうか。機構の中に取り込められた人をただ切り捨てるだけでなく、そこにある人生にも目を向けながら、自らの生きがい、働きがいを模索する姿が見えるように思う。ここに、仕事の聞き書きに取り組んだ最大の意味があると思うのだがいかがだろうか。

このように考えを深めさせた研究旅行先でのインタビューの一つを紹介しておこう。

「宮坂製糸の工女

A. S

＜宮坂製糸では、小規模であるが、明治時代を思わせる昔ながらの生糸づくりがされている。私たちが見学したときは、二人のおばあさんが作業をしていた。そのうちの一人にインタビューをしたのだが、“名前は聞か

いで下さい”と言われたので、ここではBさんともしておこう。Bさんは80歳。質問がきちんと聞き取れるのかなと思ったけど、耳はしっかり聞こえているし、話す口調もハキハキしていて、まだまだ若いなあという印象を持った。＞

60過ぎてから工場で働いています。昭和50年ぐらいになるのかな。若いときは、家でやってました。ここへ来て3・4年になります。いまの仕事は楽しい。好きだから。

昔、岡谷には製糸より他に働く場所がなかった。いまは精密だけど、若い人がやるし、年寄りには精密はダメだから。

＜生糸をつくる仕事が好きと言えるBさん。精密はダメと言っても、製糸はそれ以上に神経を使う作業だと思う。＞

ああいった女工哀史の時代もあったでしょうけど、いまは全然ないし、使ってくれる人が気をつかってくれるからね。家にいてもテレビを見てるか、本を読むぐらいしかやらないし、体が悪くなる。ここにくると仕事があるし、12時にはごはん、3時にはお茶の時間があるしね。体のきまりもよくなりますねえ。＜うちで家事をするおばあちゃんを思い出した。親が仕事に出るため、洗濯・食事の準備など、テキパキとやっている。何かやって体を動かしていた方が都合がいいし、家族の役に立ちたいと言っていた。84歳なのに、いたって元気である。Bさんもきっと同じだと思う。何か生きがいみたいなものを持っているんじゃないかな。＞

若い頃は希望とかたくさんあるけど、私たちが希望を持ったってしょうがないでしょう。だから今は、体に気をつけて、怪我をしないように、カゼを引かないように。家の人に迷惑がかかるから、そうならないようにやっていきたいです。希望があっても全然通用しないから。

＜Bさんが“希望を持ってもしょうがない”といったとき、お年寄りの希望は無意味なもの

のなんだろうかと思った。Bさん自身、通用していないと感じているのかもしれない。だったら、なおさら希望を持つべきだと思う。私にはBさんが寂しい人のように思えた。>

昔は機械で少しやっていたけど、機械の方がずっとずっと疲れますよ。手でやるのは、自分の調子で止めたりできるし、他の人に迷惑がかからないから。でも機械は止められないし、待ったなしだから。それにずっと立ちっぱなしだしね。

年寄り、何をしようとしてもふつうの会社じゃ使ってくれないから、ここで使っていただくだけで感謝しています。会社から来て下さいって言われないと仕事がない状態だし。若い人はいないですよ。みんな精密へ行っちゃいますからね。

<機械の方が楽なのかと思っていたけど、すべてを機械がしてくれるのじゃなくて人間の手もかさなくちゃできないのだ。見た目より重労働のようだ。>

孫が東京にいるんです。私、頭が悪いから、何度行っても覚えられなくて、わからないんですよ。孫にむかえに来てもらうんですけどね。今、畑とお花を少しつくっていて、とても楽しいから、東京で暮らす気はないです。近所の人たちと花を交換したり、ここで生まれたし、岡谷はいい町だから、死ぬまでここにいますよ。

<質問がすべて終わってから、Bさんは“健康が何より、体に十分気をつけて下さい”言ってくれた。“希望を持って”という、よく聞くありきたりの言葉が、何故か胸の中に残っている。

写真を撮るのに、テレながら顔を隠すBさんは、仕事というものをお金のためでなく、好きだから・自分のためにしているんだなと思った。

最も栄えた頃には300あまりの工場があった岡谷にも、今はたった3軒。また、その中で昔ながらの生糸づくりをしている人はごく

わずかである。その現代を生きる女工たちに、及ばずながら声援を送りたい気持ちでいっぱい。

自分のために働ける仕事を見つけることも、好きな仕事を見つけるってことと並んで、重要なポイントになってくると思う。>

4.「現代社会と技術」の継続性

「みんなは家に帰ってからこの旅行についてどんな感想を持っただろうか？自分が毎晩書いたレポートを見直してみてどう思ったのだろうか？

私にとってはとても不思議な旅だった。そしてとてもおもしろい旅でもあった。この「現代社会と技術」という授業のあるA1という枠は、みんなも知っての通りそれぞれの先生が独自のテーマをもって開講されている。森下先生は2年前（私たちの学年が2年生の時）から、この講座を開いてそれから授業の内容も、研究旅行も少しずつ変えているそう。そして私が今回初めて先生の口から聞いたことには、これらのテーマは先生がずいぶん昔から温めていたものであったということだ。これを聞いて、先生がこんなにまで熱心なのがわかったような気がした。今回のみんなのテーマ『聞き書き仕事』も実は技術科という科目を大きく乗り越え、みんな自身がこれから進む道への道しるべであったことに気づいていただろうか？もちろん私も高校2年の時には、そういったことに気づくどころではなかった。とにかく勉強というついでに国語、数学、社会…と科目を思い浮かべるが（もちろん、そういった勉強も必要だということは言っておくが）この授業が求めているような総合的な勉強のおもしろさは私は感じた。また、「教える」ということがなんだか「伝える」とか「お互いに考える」というようにも思えた。

私も大学に入学して半年が過ぎたわけだが、ここで改めて自分の進む道について考えるき

っかけをこの研究旅行を通じて得たと思う。」

これは、助手として研究旅行を手伝ってくれたNさんの報告の一部である。内容からもわかるとおり、彼女は開講した最初の受講生だった。その最初の研究旅行はトヨタ自動車、宮坂製糸（岡谷：座繰りと機械製糸）、青梅の東芝（パソコンの組立）だったが、彼女は卒論で宮坂製糸を取り上げ3年生で再訪している。いまだ、3・4年間の取り組みだが、年度をこえて関わってくれる生徒がいることに課題設定の一定の妥当性があったのではないかと思っている。

5. 職業・労働の教育を模索する和光高校の新カリキュラム

このような取り組みを行っているのは次のような視点からである。学校教育法が、高等学校は「高等普通教育及び専門教育を施すこと」を目的とすると規定していることはよく知られているところである。ところが、高等学校普通科においては「専門教育」に当たる教育はほとんど行われていない。

和光高校では早くからこの点に疑問を持ち、1978年から、2年生、3年生に各1科目2単位ずつを選択科目として設置し現在に至っている（現在の科目名は機械工学、電気電子工学）。さらに、1990年度から、上記の「現代社会と技術」という選択科目を加えてきた。

'94年のカリキュラム改訂はこの点についても検討課題の一つとしていた。私たちは、カリキュラムの検討にあたって、めざすべき学校像も提起した。それは、「準義務教育化した大衆の高等学校の創造」である。つまり、90数%の子どもたちが学ぶ高等学校、偏差値等で序列化された高等学校という現実の中で、序列化の中に組み込まれることを拒否し、誰でもが学べる学校、多様な子どもたちが相互にかかわり合いながら学び、生活する学校をめざそうとした。当たり前のことのようにだが、

上記のような状況においては、新たな目標となり得るものではないだろうか。和光高校のめざす方向が現実性を持っているのは、私立学校で併設する中学校があり、特別なことがなければ内部進学者を受け入れることを基本としているからである。外部から2/5ほど入学するが、トータルすると学力的にも、資質の面においても実に多様な生徒を抱えていることになる（幼、小も存在し、小・中においては障害児枠も設けて共同教育を行っている）。

私たちは、実態として、同質でない、多様な生徒を擁していることを直視し、そこに積極的な課題を見いだそうとしたわけである。そこから導かれるカリキュラムの基本的な考えは、必修科目の絞り込み（共通学習の精選）、選択科目の充実、である。ここではカリキュラムを問題としているのではないので、表題に関わる範囲で触れることにしよう。前者については、3年の教科目を整理し、必修科目は政治経済3単位、体育2単位、総合学習2単位に絞った。必修選択4単位であり、他は、とらない自由もある自由選択である。教科目の整理とあわせ、必要な共通学習は何かを問い、同時に、授業改革をも主要な課題として追求している。

その方向は『「準義務教育化」された大衆の高校教育を内容的につくりあげて行くとは、青年がこの現実社会に向き合い、そこに踏み出し、切り開いて行く力を育てることを目指すことであろう。つまり、現実の社会と切り結ぶ内容が求められなければならないし、その社会を分析し、自らの道を切り開く現実的な知見を獲得させることが求められる。このことは、既定のものをただ、生徒に与えることでは実現されない。生徒にこのような目的意識が醸成され、自ら探求し、学びとていく場に授業がつくりかえられなければならないだろう。』とまとめている。これは、すべての教科で求められるところだが、特に以前

から各学年に必修として設けられてきた総合学習で実現をはかろうとしている。

このような検討の中で、上記の「専門教育」の充実も主要の柱の一つとした。その一つが1年生の総合学習の改編である。従来、1年は現代の暮らしと家族、2年環境と人間、3年生命と人権、のテーマで取り組んできたが、労働や職業の問題が部分的には触れられてはいても、正面から取り組まれていなかった。94年からは、1年生で1時間増やし、労働や職業の学習を組み込むこととなった。これは未だ実践していないので計画にとどまるのだが、ここで紹介したような形で自分の目で様々な職業や労働を見、あるいは働く人から聞き取るといった内容を考えている。ある研究会の場で、参加した和光の父母が、「子どもが3年生となって受験勉強をする段階で、職人が自分にあっているのではないかと言い始めた。しかし、その分野についての知識もなく、準備もなかったので、大学に進んでから考えるということになった。高校の早い時期に、自分の進路としてどのような分野があり、可能性があるか知る場を設けてほしい」と発言していた。多くはないかもしれないが、このような要求もある。従来の普通科のカリキュラムでは対応できないものである。

さらに、3年生の必修選択の枠に、専門教育科目群を設けることとなった。青年期の教育は自らの進路を選択できる力を養うことを主要な課題としていることを考えると、職業や専門分野についてその内容や実態について知ることが重要となる。1年の総合学習の発展として各人が分野を選び学ぶことができるようにする。しかし、これの開設は96年度からとなるので2年間準備を重ねて取り組む予定である。

6. 高校普通科における職業・労働・技術教育を考える

今回自分の実践をまとめるのに非常に苦労

をした。この「現代社会と技術」では、生徒のレポートあるいは感想、インタビューのまとめはだいたい印刷して冊子に綴じて生徒に戻している。それを合わせると数百ページとなるだろう。それは、一人ひとりの生徒が取り組み、つかみ取ったものを誰かひとりのものに代表させることのできないと思ったからである。もちろん生徒によって表現の巧拙、掘り下げの違いがある。だが、どれもその生徒なりのものとなっている。その中から、特定のものを選び出し紹介することの難しさを感じたわけである。どれかを選ぶと、他のものの良さが表現されない。だからといって、要約した言葉にすると平板になってしまうように感じた。

ある意味では、人にとって職業とか仕事とかいうものは自己のすべてともなるものではないだろうか。そう思えば思うほど、一人ひとりがつかみ取り表現したものを大切にしたいと考えたわけである。とはいえ、すべてを紹介することなどできようもないのでいくつかに絞った。そして、できるだけ部分にならないよう心がけた。

ところで、この「現代社会と技術」の実践は何回か発表してきている。その中でいくつかの疑問や批判が出されている。それを検討しておきたい。

その一つに、この授業はいったい何をねらっているのか、というものがある。これは、何を教えようとしているのかというニュアンスで問われている。確かに、科目名である「現代社会と技術」からすると、現代社会における技術そのものを教えるか、あるいは現代社会の中での技術の位置、役割を教えるという感じになる。しかし、やっていることは調査であったり、インタビューあるいは見学であって、何を教えているかはっきりしないのである。だが、ある生徒は、「校外学習というのは、学校の中で勉強するのはちがういいことだなあと思った。なんか視野が広が

りました。」という。また、本文の中でも紹介したように生徒たちは自分の頭を使って一生懸命考えている。卒業生のNさんは総合的な勉強のおもしろさを指摘し、学習が「お互いに考える」ことである意味のことを述べている。つまり、生徒たちは授業をかなり柔軟に捉えている。働く人、職業を持つ人の働きがい、生きがいを探り、自分の中に批判的に取り入れることに意義を見いだしている。ある生徒は、「人にインタビューして何になるのか」とくっつかかってくる。いまだ、取り組んでいないときである。そのときは余りよい説得ではないがまずやってみようといった。その彼はなかなかおもしろいインタビューをまとめ「自分と全く違う考え方をする人に話を聞くのはとてもおもしろく、また興味深いことだった。」と感想を述べている。そういつたことから、現代の高校生に職業や労働を考える場を設けること自体がねらいとなっていると言える。

このように考えるのは、生徒たちのほとんどが調査研究、研究旅行、仕事の聞き書きに肯定的、積極的感想を述べているからである。私自身の授業実践の中でも数少ないものの一つといえるだろう。授業の形態としてはこれまでのものとはかなり異なるが、自分たちが活動することによって、これまでの自分にはないものを生徒は獲得しているのだろう。このことはもっと重要な事実を示しているようにも思う。それは、現代の普通科の高校生は、ここに紹介したような場を設定しなければ、働くこと、職業を持つこと、あるいは働く人々、職業人について考える機会がほとんどないということである。そういった事実を踏まえて、現代青少年の職業・労働教育を構想しなければならぬということでもあろう。

だが、個々の生徒が学校の外に出て行って職業人から学んできたことをどうまとめ、みんなのものにしていくかという点では未だ不十分である。学校での授業の際には「現代の

労働の諸問題」として外国人労働者問題、フリーターの問題、3K労働問題、産業構造の問題などを取り上げているが、インタビューや調査が十分に反映するような組み立てができていない。討論の組織が課題となっているが、手をこまねいている状態である。仲間が仕上げたインタビューを読み、コメントをつけて渡すような取り組みはしているが、仕事のとらえ方、あるいは労働であれ、職業であれ、観といったものについて互いに高め合うような話し合いはどうしたら可能となるのだろうか。弱音を吐かずに挑戦していこうと思っている。

次のような疑問も出された。和光の親は私学に通わせることができるようないわゆる中産階級的な人たちではないか。その親たちを「聞き書き」して何が得られるのか。といったものである。それとの関連で、労働観を育てようとしているのかどうかとも問われた。ここにはかなり難しい問題が含まれている。質問者の意図を問いただしたのではないが、生産現場での労働が典型的なものとしてイメージされているように思われる。この取り組みでは、あえて労働観を育てるとは表現していない。現代は6割近くの就業者が第三次産業に従事している。これまで、どちらかというとも物的生産に関わる労働を想定した労働観が語られていたように思う。サービス業を含めた労働についてはどのように労働観が論議されてきたか考えようとするとはタツと困ってしまう。生徒たちの身の回りの職業や労働は圧倒的に第三次産業となっている。そこから出発しなければ、教え込みになってしまうだけである。自分自身が労働観や職業観を再考しながら進めないと普通科の高校生に労働や職業を考えさせることはできないとも考えている。この点についても、これからの課題である。また、労働観は労働を知り、従事することによって育てられ、鍛えられていくのではないか。労働の現場と切り離れたところ

で取り上げてても観念的なものにとどまるおそれがある。それは、かえってマイナスとなる危険性さえある。

これにかかわって、技術教育にたずさわってきたものとして、技術教育観の捉え直しをしなければならないのではないかと思います。このように述べると物議をかもしかもしれないが、小・中・高に一貫してまず必要となるのは、普通教育としての職業教育あるいは広い意味での労働教育ではないかと思う。技術教育ということでは、どうしても物的生産の範囲で考えてしまうのではないだろうか（コンピュータの普及による広がりもみられるが）。技術教育と別途に職業についての教育を想定するなら別だが、中学校が技術科であるから（社会科との関連も問題となるがここでは脇に置く）、その中で、職業に就くこと、働くことも主要なテーマとして取り上げることが必要ではないか。技術教育の中にこのような課題がどのように位置づくか改めて考えてみたい。それとの関連で教科内容も検討する必要があるように思うがいかがだ

ろうか。

私自身の技術教育研究としてみると、戦後の分野については技能教育を軸に見てきたが、改めて、職業科・職業家庭科から技術科に改編された過程を、普通教育における職業教育という視点から見直したい思いに駆られている。

今回貴重な誌面をかなり使わせていただいた。その価値があるかどうか未だ自信がないのだが、現代の高校生が仕事や職業にきわめてまじめに、真剣に向き合っていることを知ってもらいたかったために原文を豊富に使った。最後のところで若干考察を試みたが、現在の高校進学率、そこでしめる普通科の率、産業構造の変化といったことから、対比して考えるべき先行研究を探し出すことができなかった（その努力もあまりしていなかったが）。そのため、論ずるというより、課題の羅列に終わったように思われる。ご意見、ご批判を期待したい。

技術教育研究会の入会ご案内

技術教育の民主的発展のために、ともに研究と運動を発展させましょう。

☆ 小学校の図工科、中学校の技術科、高校の職業関係学科、職業訓練校などさまざまな分野で技術教育にたずさわっておられるみなさん。

☆ 技術教育をめぐる諸問題に関心をもっておられるみなさん。

☆ 技術教育や職業訓練を民主主義的に発展させることをねがっているみなさん。技術教育研究会にお入りくださいませんか。

技術教育研究会は、技術教育を民主主義的で豊かな内容のあるものに発展させるための諸問題を研究する人々が自主的に集っている全国的な研究団体です。会員には、小・中・高校の技術教育関係の教師、研究者、職業訓練校の指導員などがいます。こういう人々が集って、規約と活動方針にもとづいて、技術教育の諸分野の現状や問題点を分析し、実践上の諸問題の解明

につとめ、また、国内や諸外国のすぐれた経験に学ぶ努力をしているのです。

恒常的な活動としては、年8回の『会報』を発行して研究と実践を交流し、年1回（従来は8月）の大会や合宿研究会を開催してきました。また、一部の地域に支部が置かれ定例的に研究活動も進められています。研究成果をひろめるために雑誌『技術教育研究』を刊行しています（会費と別に実費配布します）。

☆ 私たちは志を同じくする方が入会してくださることを歓迎しています。入会手続きは申し込み書に会費年額4,000円をそえて申し込んでくださるだけでよいのです。

☆ とともに、日本の技術教育の民主主義的な発展のためにがんばりましょう。